

イスラエル国、テル・レヘシュの「下の町」 —第12次調査(2019年)を中心に—

橋本 英将 天理大学文学部准教授
小野塚拓造 東京国立博物館研究員
桑原 久男 天理大学文学部教授

Lower Shelves of Tel Rekhes, Israel: From the 2019 Excavation

HASHIMOTO, Hidemasa Associate Professor, Tenri University
ONOUKA, Takuzo Assistant Curator, Tokyo National Museum
KUWABARA, Hisao Professor, Tenri University

イスラエル国、テル・レヘシュの「下の町」—第12次調査(2019年)を中心に—

1. はじめに

2006年より開始した日本・イスラエル隊によるテル・レヘシュ調査は、2019年までに第12次までの調査を重ねた。これらは主要な調査課題により、大きく第1期(第1～6次)、第2期(第7～11次)、第3期(第12次～)に分けられる。本報告では、第3期調査における主要課題である、後期青銅器時代から鉄器時代への移行期を明らかにする目的で、テル中位平坦面の通称「下の町」で実施された第12次調査の成果を紹介するとともに、同じく「下の町」で実施された、第1期調査の成果の一部を参照し、現在までの認識と今後の見通しについて整理する。

2. テル・レヘシュの概要

テル・レヘシュは、イスラエルの下ガリラヤ地方に位置する、面積約4.5haの遺跡である。遺跡の麓に沿って、東を除く三方を、タボル川・レヘシュ川の二つの小河川に囲まれ、周囲はテルの頂部よりも標高の高い丘陵に囲まれる。タボル山を遠くに望む、西方のみ視界が広く開ける、という立地条件にあり、前期青銅器時代以降、初期ローマ時代に到るまで、ヘレニズム時代を除くほぼすべての期間を通して、居住の痕跡が確認されている。とくに後期青銅器時代や鉄器時代には、新王国エジプトの文字資料や、旧約聖書にも登場する「アナハラト」と呼ばれる都市であったと考えられている。日本・イスラエル隊による本遺跡の発掘調査は2006年に開始され、これまでにアクロポリス南側の後期鉄器時代の複合建造物や、同中央部に位置

する、ローマ時代の初期シナゴグ遺構などの存在が明らかとなっている。ただし、アクロポリスは自然丘陵上にあり、後期鉄器時代ないしローマ時代の遺構の下から直接岩盤が検出される個所が多く、歴代の居住層の連続的な堆積を確認することはできていない。青銅器時代に関しては、おおそアクロポリス縁辺部に限り、後世の造成を免れた遺構が確認されているにすぎない。一方で、テルの斜面中位にテラス状に広がる通称「下の町」では、2007年から2010年にかけて調査が行われた際に、中期青銅器時代から鉄器時代I期までの安定した堆積が確認されている。第3期調査の目的である、後期青銅器時代から鉄器時代への移行期の様相を探るためには、「下の町」の調査が肝要であるとの認識のもと、2019年に新たな調査区が設けられ、その成果についても概要が報告されている(桑原他2020)。

3. 「下の町」における過去の調査(図1)

これまでの調査区のうち、「下の町」として認識されるのは、テル南側中位の狭い平坦面に設けられたD8地区、および同北西部の比較的広い平坦面に設けられたE2およびC2/D2地区、そして第3期調査である2019年に設定された、「J地区」である。このうち明瞭な遺構や、安定した遺物包含層などが確認されなかったE2地区については省略する。なお、第3期調査より、調査区の表記法を変更したことを付記しておく。

3.1. D8地区

2006年の第1次調査時、D8地区では地表に岩盤が



図1 「下の町」の調査区



図2 D8 地区住居址(北から)



図3 D8 地区オリーブプレス

露出していることから、もっとも初期の居住層が把握できる可能性が期待された。テルの長軸に沿う形で調査区が設けられ、その発掘成果の概要は既報の通りである(日野・巽 2007、小野塚他 2010)。結果としてこの区域では、青銅器時代の遺構・遺物は確認されず、岩盤の直上に直接鉄器時代Ⅰ期の土器を伴う住居址や、

2基のオリーブプレスが検出された(図2、図3)。青銅器時代には居住されなかったこの区画が、鉄器時代Ⅰ期に入り利用されるようになったとみられる点と、そこにオリーブオイル生産が生業活動の一つとして伴うことが認識された。

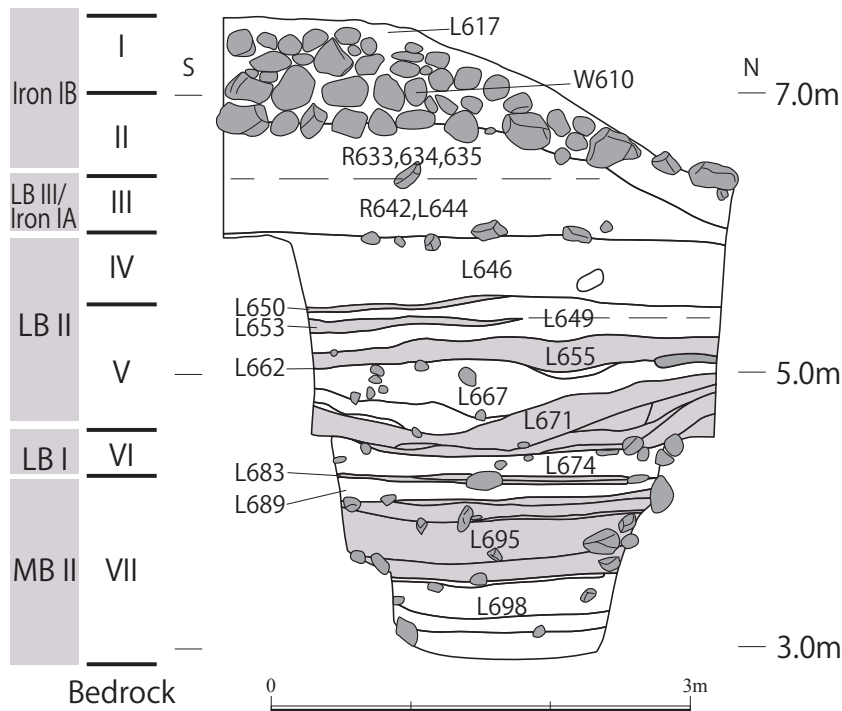


図4 C2/D2地区の基本層序(C2i6 グリッド)



図5 C2/D2地区全景(2009年調査時、北から)

3.2. C2/D2地区

C2/D2地区では、「下の町」全体の基本層序を確認するために2010年に深堀されたC2i6グリッド西壁から、中期青銅器時代から鉄器時代IB期までの連続した堆積が確認できる(図4)。岩盤の直上に中期青銅器時代の生活面(床面)が連続的に堆積し(VI層)、後期青銅器時代I期まで続く(VI層)。後期青銅器時代II期には整地土が入れられ(L667・L671)、さらに生活面の堆積が連続する(V層)。その上層、生活面の可能性が高い遺物包含層L646(IV層)を経て、後期青銅器時代末～初期鉄器時代(III層)、鉄器時代I期(II層、I層)と続く。「下の町」が、中期青銅器時代以降、鉄器時代I期までの間、あくまでこの調査区の範囲内で確認

できる限りであるが、破壊や放棄の痕跡を示さず継続して居住されてきたことは注目される。

C2/D2地区全体の発掘は、上記I-VII層までのうち、実際には鉄器時代I期に相当するI-II層までしか掘削できておらず、一部の区画でわずかにIII層の遺構を露出させるにとどまった(図5)。これまでC2/D2地区全体の複合建造物について、後期青銅器時代から鉄器時代I期と報告してきたが、近年の整理により、この点について若干の修正が必要であるとの認識に至った。出土遺構や遺物の概要は既報の通りであるが(小野塚他2010、桑原他2011)、特に注目されるのは、オリーブプレス、立石が見つかった建物769である(図6)。オリーブプレスに伴う床面は数面が薄く連続して堆積しており、その直上からは青銅器時代末～鉄器時代初期にかけての土器が出土している。活発な活動を想起させるが、その上面に載るように検出された立石が、オリーブ油生産がおこなわれた時期に伴うのか、オリーブプレスが埋められた後に、若干時期を遅れて建てられたのか、慎重な検討が必要である。現状では、この区域の変遷として、①(III層またはII層)オリーブプレス(立石並存の可能性)、②(II層)オリーブプレス埋め殺し・立石、③(I層)立石埋め殺し・床かさ上げ、といった変遷が復元できる。なお、II層からI層への変遷時には、C2/D2地区の複数の石壁が、積み増しのうえで再利用されているのが確認される。



図6 C2地区オリブプレスと立石

近接する区画の鉄器時代Ⅰ期に相当する層からは、土製仮面も出土しており、ある段階では祭祀的な性格の空間であったと推定できる。

4. 2019年調査(J地区、図1、図7)

2019年の調査については、既にその概要を報告している(桑原他 2020)。このため大部分の内容が重複するが、本報告では、第1期調査での成果と比較するうえで必要と考えられる部分に絞り、再度略述する。

明瞭な遺構の一つとして確認されたのは、調査区東部で確認された、南北方向の一連の壁 W6011/W6014 である。幅 90 cm の比較的堅固な壁であるが、壁の西側は付随する構造物がなく、壁の東側は調査区の東縁にほぼ接する。このため現状でこの壁の性格を論じることができないが、F5 グリッドの南壁際で、一段分石が抜ける部分があり、この部分が出入口であった可能性が考えられる。また、F5 グリッド北壁を観察すると、壁の際にファウンデーショントレンチと考えられる掘り込みが上下に二つ確認できる(図8)。W6011 の側面を観察すると、最上段に直径 50～70 cm の石材を用いているのに対し、それより下段では比較的小型の石材を使用している。積み増しを経ながら複数の時期に渡って使用されていると想定される。一方、W6011 の南側への延長と考えられる W6014 では特に南側で大きな石が使用されず、様相が異なる。これらの壁に伴う床面は、壁の西側で少なくとも 2 面確認されており、継続的な使用を裏付けている。なお、下層の床面の直下からは、礫敷きが広がるのが確認された。

調査区の中央、F4/G4 グリッドでは、はっきりとした構造物は検出されず、西側に緩やかに下る緩斜面をなす。ただし両グリッドの西側では、W6011 の下

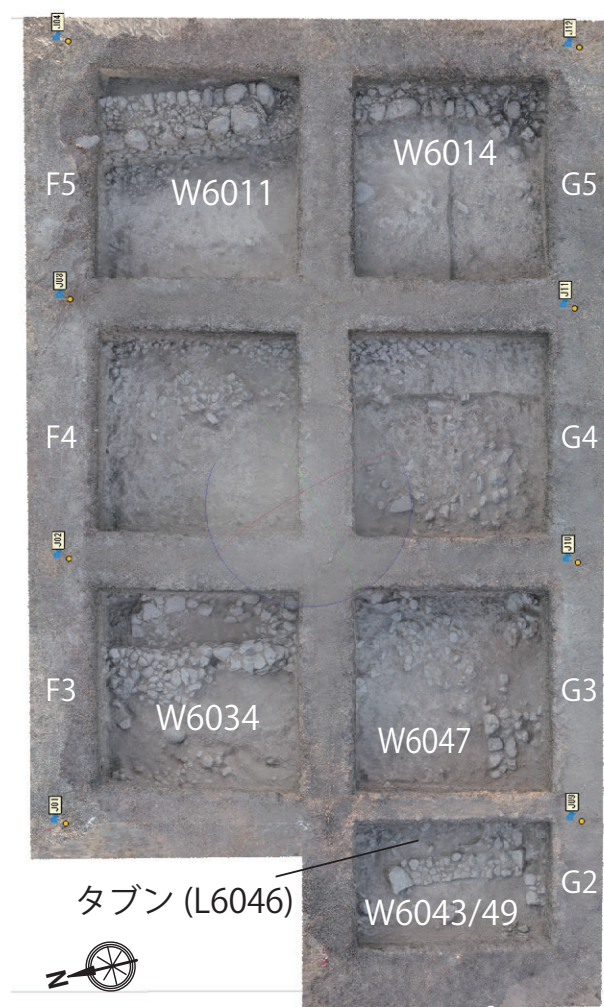


図7 J地区 2019年調査区全景

層床面直下で検出された礫敷きに類似する礫敷きが一部確認された。この区画が広い通路であった可能性が考えられる。

もう一つの明瞭な遺構は、調査区西側、G2/G3 グリッドの、W6043/W6047/W6049 により構成される遺構である(図7)。G2 グリッドでは、表土直下から土器片や動物骨を含む層が続き、その下から検出されたのが壁 W6043 と W6049 である。G3 グリッドで W6049 の延長に当たる位置で検出されたのが W6047 である。W6043 と W6049 の内角に当たる部分ではタブン(L6046)が検出された。このことから周辺は床面に近いことが推定されたが、調査期間の制約から、床面まで到達することはできなかった。出土した土器は鉄器時代初期のものが大半であり、遺構の時期をほぼ示すものと考えられる。なお、G3 グリッドの北側、F3 区画からは、壁 W6034 が検出されている。方向は W6043 に平行し、W6047 に直交することから、一連



図8 W6011のファウンデーショントレンチ

の建物を構成する可能性がある。

5. おわりに

これまでに行われた「下の町」の調査成果をふりかえると、すでに指摘されてきたように、鉄器時代Ⅰ期に、テル・レヘシュの居住域が最大になり、当該期にはオリーブ油生産が盛んにおこなわれていたとの認識はより強固なものとなった。一方、第1期の報告書作

成に伴う整理作業の過程で、C2/D2地区の遺構は多くが鉄器時代に属し、後期青銅器時代の居住域・街区等は未だ詳らかでないこともあらためて確認された。J地区における今後の調査の進展に大きな期待が寄せられる。

本報告は、科学研究費補助金(課題番号19KK0305－小野塚拓造、課題番号19H01349－桑原久男、課題番号20K01110－橋本英将、課題番号17H04527－長谷川修一)による成果の一部である。

■参考文献

- ・小野塚拓造・月本昭男・桑原久男 2010「イスラエル、テル・レヘシュ遺跡 2009 年(第5次)発掘調査—青銅器時代から鉄器時代への移行期を探る—」『第17回西アジア発掘調査報告会報告集』95-100 頁 日本西アジア考古学会。
- ・桑原久男・月本昭男 2011「3,000 年の居住史を探る—イスラエル、テル・レヘシュ遺跡 2010 年(第6次)発掘調査—」『第18回西アジア発掘調査報告会報告集』100-104 頁 日本西アジア考古学会。
- ・桑原久男・間舎裕生・橋本英将 2020「アナハラの歴史解明へ向けて—イスラエル、テル・レヘシュ第12次発掘調査(2019 年)—」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』31-34 頁 日本西アジア考古学会。
- ・日野宏・巽善信 2007「イスラエル国、テル・レヘシュ遺跡第1次調査(2006 年)」『第14回西アジア発掘調査報告会報告集』82-87 頁 日本西アジア考古学会。